



Title	幼児および児童による感情語の使用 : 他者の感情の説明
Author(s)	仲, 真紀子
Description	第3章
Relation	財団法人セコム科学技術振興財団研究助成平成19年度研究成果報告書 : 幼児の安全教育に関する総合的研究 : 幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響, pp. 39-46
Issue Date	2008
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44802
Type	report
File Information	SKZ2008_39-46.pdf



第3章

幼児および児童による感情語の使用：他者の感情の説明¹

北海道大学大学院文学研究科 仲真紀子

体験や出来事の報告において、感情は時間、場所、人物、活動などと並ぶ重要な構成要素である。感情について語ることは、その体験や出来事が自分のものであることを再確認し、出来事の原因や結果を理解し（Dunn, Brown & Beardsall, 1991; Dunn, Bretherton & Munn, 1987）、意味づけるにつながる（Fivush, Hazzard, Sales, Sarfati, & Brown, 2003）。また、感情について語ることは、自分がどのような人間であるのか、感情を通じてどのように人と関わっているのか、感情をどう統制すればよいのか等を知る手がかりにもなる（Bird & Reese, 2006; Fivush, Berlin, Sales, Mennuti-Washburn, & Cassidy, 2003; Welch-Ross, Fasig & Farrar, 1999）。より現実的な場面においては、子どもによる感情の報告を得ることで、大人は子どもの活動の質を推測し、安全な環境を確保し、維持することができるだろう。危害が及びそうな状況において明確に「怖い」と思い、それを表現できるかどうかは、防犯の上でも重要なことと思われる。本研究では幼児および児童が用いる感情語、特にネガティブな事態における感情語の使用について検討する。以下、幼児、児童がもちいる感情語、感情表現についての先行研究を外観した上で、本研究の課題に入る。

幼児はいつごろから感情について話すようになるのだろうか。Dunn らによれば、幼児は2歳頃から内的状態に言及するようになるという（Dunn, Bretherton & Munn, 1987）。Dunn らは幼児が18ヶ月、24ヶ月、25ヶ月、36ヶ月の時点における幼児と母親、幼児ときょうだいの会話を分析した。意識の質（眠い、疲れた）、感覚・生理学的状態（おなかがすいた、気分がわるい）、感情状態（怒った、怖い、悲しい、楽しい）への言及がある発話をカウントしたところ、幼児が18ヶ月の時点では、母親だけが内的状態に関する発話を行っていた。しかし24ヶ月の時点では、幼児自らが内的状態に関わる発話を行うようになる。2時間の観察におけるそのような発話は24ヶ月、25ヶ月、36ヶ月の時点でそれぞれ平均4、5、12であった。

日本では、「用例集-幼児の用語」（岩淵・村瀬, 1976）が参考になる。この用語集は3人の幼児が0歳から5歳になるまでの期間に、高い頻度（月1回の観察で、全体として8回以上）で観察された1051語を収録したものであり、各語につき、どの時期にどの幼児が安定して用いるようになったかという情報が併せて示されている。この資料のなかから感情に関わる語（よい、おもしろい、しあわせ、いや、こわいなど）を拾い、3人全員が用いるようになった順に並べてみると、24ヶ月で「おもしろい、こわい」、30ヶ月で

¹ 本研究は安全教育プロジェクト、および科学研究費補助金基盤研究B（課題番号17330133）子どもの面接法-出来事を話すための語彙の補助を受けた。安全教育プロジェクトによる補助は、データの記録と分析のために用いた。記して感謝する。なお、本稿の一部は仲真紀子著「子どもの語りと感情表現」佐藤浩一（編著（近刊）「自伝的記憶の心理学」（北大路書房））に含められる予定である。

「よい、おこる」, 36 ヶ月で「わるい、ざんねん」が用いられるようになる。概ね2歳から感情語を用いるようになるといえるだろう。

このようにして開始される感情への言及は、学童期を通じてさらに充実する。Harter & Whitesell (1989) は、複数の感情に関する理解の発達の道筋を、概ねの年齢的目安とともに、以下のように示した。

- レベル0 (5歳) : 複数の感情が同時に存在することが理解できない。
- レベル1 (7歳) : 一つの対象に対する、同じヴァレンスの感情が同時に生起することを理解する。お兄ちゃんが叩いたらむかつくし、悲しいなど。
- レベル2 (8歳) : 異なる対象に対する、同じヴァレンスの感情が理解できる。あの子がこれを壊したのは頭にきて、そのまま帰ってしまったのは悲しかったなど。
- レベル3 (10歳) : 異なる対象に対する、異なるヴァレンスの感情を理解しはじめる。この段階では、この側面は嬉しいが、この側面は嫌だといった焦点のシフトが生じる。おにいちゃんが叩いたときはむかついたけど、パパが叩きかえしていいよって言ったときは嬉しかったなど。
- レベル4 (11歳程度) : 同一の対象に対する異なるヴァレンスの感情を記述できる。プレゼントは嬉しいけれど、期待していたのとは違ってがっかりしたなど。

しかしながら、特定の事態でどのような語をどの程度用いることができるのかを組織的に検討した研究は少ない。例外的な研究として、Aldridge & Wood (1997) は幼児、学童、大人までを対象に、スベリ台から落ちる、友達に無理矢理遊びに誘われる、賞品としてもらったスケート靴を父親が兄にやってしまう等のネガティブな小話を人形を用いて提示し、人形がどのように感じているかを尋ねるといふ調査を行った。この調査において参加児の5割以上が用いている語を挙げると、5歳児、6歳児では happy, sad, 7歳児ではこれに加え pain, 8歳児、9歳児、10歳児ではさらに anger, excitement, fear が加わり、11歳児では anxiety が加わる。しかし、大人では可能な pride や coercion はまだ用いられないという結果であった。

本研究では、Aldridge & Wood (1997) の研究を参考に、幼児および児童における、ネガティブな場面における感情語の発達を検討する。

方法

参加者 北海道都市部の2カ所の幼稚園、および2カ所の小学校の幼児、児童計127人が調査に参加した。内訳を表1に示す。

材料 Aldridge & Wood (1998) にならい、軍手人形による小劇を10個作成した。

出来事は、(1) 先生の眼鏡がなくなる、(2) ヨッちゃんが眼鏡を見つけてあげる、(3) ミイちゃんがタツ君に髪を引っ張られ、無理矢理遊びに誘われる、(4) ハルちゃんが他者が落とした植木を直していたところ、おじさんから叱られる、(5) トモコちゃんが遊びに入れてもらえない、(6) チーちゃんの頭にボールが当たる、(7) ジロウ君が木に登り、降りられなくなる、(8) マアちゃんのお母さんが帰ってこない、(9) マアちゃんのお母さんが帰ってくる、(10) マアちゃんのお母さんがマアちゃんを抱きしめてくれるであった。

表 1：参加者の内訳（人）

	男児	女児
幼児（年中、年長）	22	19
1年生	8	13
2年生	14	12
4年生	11	7
6年生	11	10

各人形劇はそれぞれ 30 秒から 1 分程度であり、(2)，(9)，(10)はポジティブ，残りはネガティブな場面を想定している。人形は「眼鏡がない」「降りられない」などの活動に関する言葉は発するが，感情語は用いない。図 1 は，(1)の一シーンである。

木から降りられなくなる



図 1：人形劇の一場面

9

手続き 幼児と小学校 1 年生は個別面接により，他の一連の調査の一貫としてこの課題を行った。面接者はラポールをつけた後，パソコンの 14 インチのモニターで DVD を提示した。小劇ごとに停止させ，(a) 各登場人物の気持（「先生，どんな気持ちかな」），および (b) 対象児はその人形のことをどう思うか（「〇〇ちゃんは，先生のことどう思う」）を尋ねた。一人の幼児に (a) (b) の両方の質問を行った。

小学校 2，4，6 年生については質問紙を用い，集団で調査を行った。質問紙にはふりがなをふり，また，「ビデオのなかの先生」というように，誰を指しているのかを明確にした。学級ごとにプロジェクタを用いて人形劇を DVD で提示し，各出来事について，(a) 各

登場人物の気持ち、または(b) 対象児はその人形のことをどう思うかを尋ねた。小学生においては(a) (b)を参加者間要因とした。

なお、いずれも個人情報、倫理的配慮に注意し、保育士、教員の許可指導のもとに調査を実施した。

結果

ここでは、他者の感情(a)の結果を報告する。以下、感情語の種類とその内容について分析する。

各課題における感情語の使用

回答を電子化し、述語で区切り（見つかって／嬉しい等）、課題ごとに感情を表す語をカウントした。回答には「木から降りたい気持ち」等の行為を表すものや「あつという気持ち」などの間投詞を用いた表現もあったが、ここでは感情や内的状態を表す語（Shaver, et al. 1987）をカウントの対象とした。

得られた感情語について、性別×学年（幼児、1年、2年、4年、6年）×課題（10課題）の3要因分散分析を行った。課題のみが参加者内要因である。その結果、学年、課題の主効果が有意であった（ $F(4, 117) = 4.13, p < .01$; $F(9, 1053) = 5.90, p < .01$ ）。6年生の反応は他の年齢段階の幼児、児童よりも多く、また、「ボールが当たる」「お母さんが帰ってこない」の課題では、反応が他の課題よりも少なかった。また、学年×課題の交互作用が有意であった（ $F(36, 1053) = 2.37, p < .01$ ）。結果を図2に示す。「ハルちゃんが他者が落とした植木を直していたところ、おじさんから叱られる」という理不尽な出来事において、6年生での反応が高い。ネガティブ、ポジティブの違いによる組織的な差異は見られなかった。

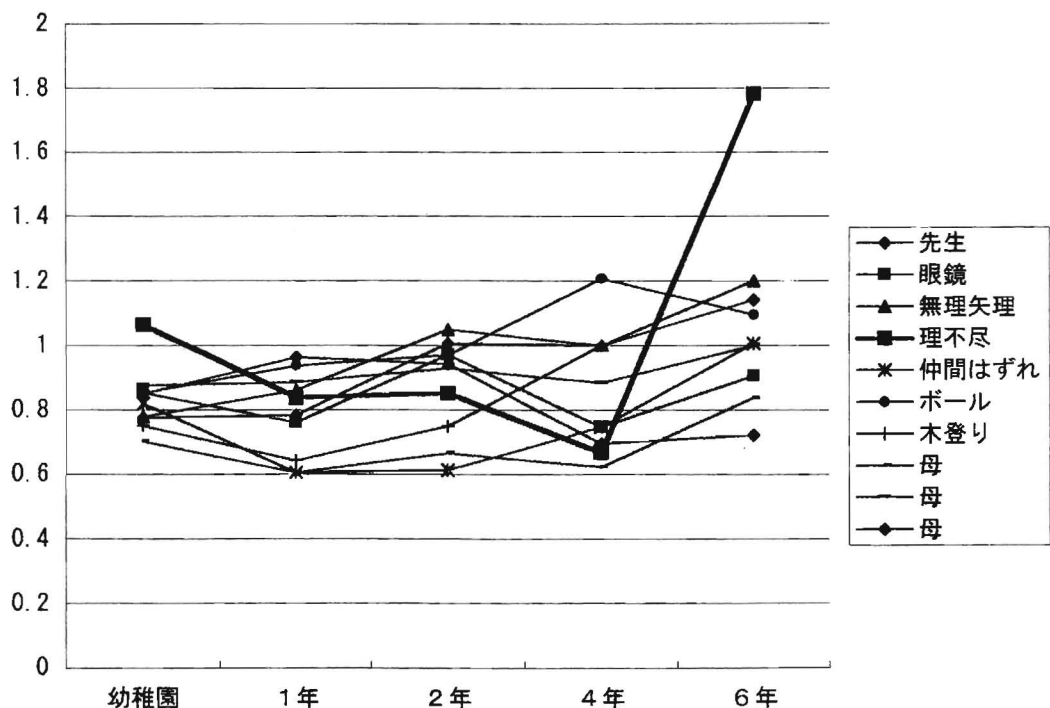


図2：各課題への反応

感情語の種類

次に感情語の種類について分析する。ネガティブな課題，ポジティブな課題において，用いられる感情語の種類は異なるだろうか。

まず，ネガティブな場面（7 課題），ポジティブな場面（3 課題）ごとに感情語（異なり語）をカウントした。その結果を図3に示す。全体としてネガティブな語の種類の方が多く，その傾向は年齢とともに高まっている。

年齢差について一般児について学年×性別による一要因分散分析を行ったところ，ポジティブな語については年齢の効果のみが有意であり（ $F(4, 117) = 7.22, p < .01$ ），下位検定の結果，幼児の語数が2年生，6年生よりも少なかった。

ネガティブな語については年齢，性差が有意であった（ $F(1, 117) = 4.81, p < .05$ ； $F(4, 1117) = 27.5, p < .01$ ）。下位検定の結果，幼児，1，2，4，6年生間に差が見られた。また女兒の方が語数が多かった（4.75 v 4.03）。

先の分析で見たように，各課題において用いられる感情語の数には差はない。しかし，感情語の種類は，ネガティブな課題におけるものの方が多かった。次に，その内容を見ていくことにする。

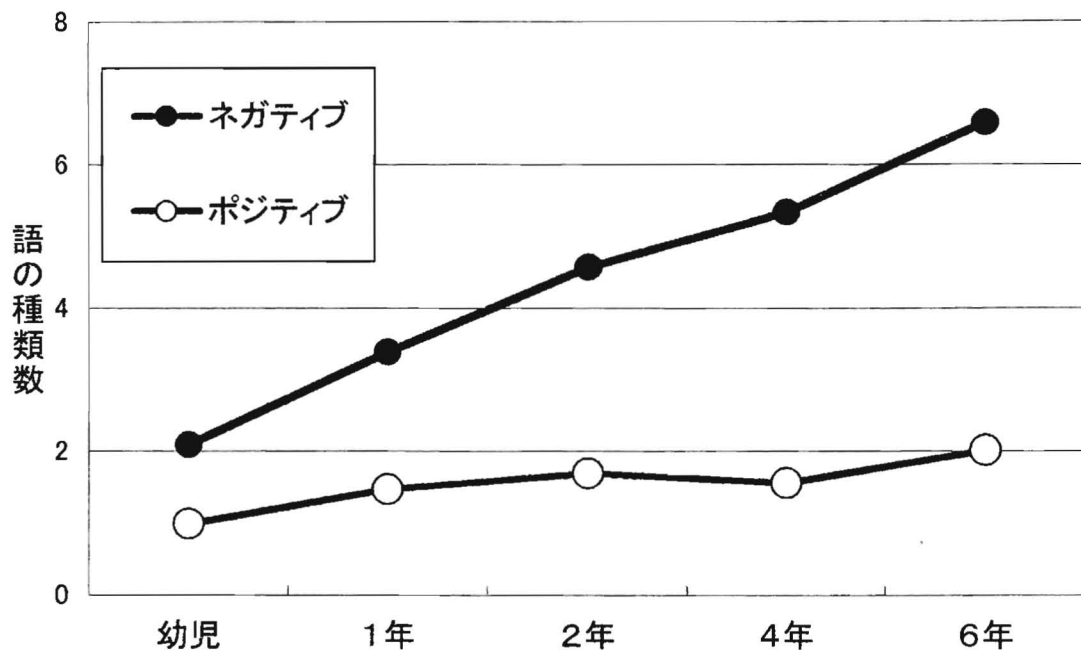


図3:感情語の種類(異なり語数)

感情語の内容

ネガティブな課題，ポジティブな課題において，比較的高い頻度で用いられた語を表2に示す。数値は使用した対象児の%である。ネガティブな語の方が種類が多いことがわかる。

この結果はネガティブな課題が7つであり，ポジティブな課題が3つであるという結果

を反映しているのだろうか。各課題について、10%以上の子どもが用いている主たる反応を見ると、ポジティブな3課題（眼鏡が見つかる、お母さんが帰ってくる、お母さんになでてもらおう）における主たる反応は「嬉しい」「良かった」の2つのみであった。つまり、眼鏡が見つかって、お母さんが帰ってきて、なでてもらっても「嬉しい」「良かった」ということになる。これに対し、ネガティブな課題では、課題ごとに異なる反応が見られた。眼鏡がなくなった場面では「困った」「悲しい」、無理矢理遊びに誘われる場面では「嫌だ」「無理矢理」、突然叱られる場面では「怒る」「嫌だ」「悲しい」、ボールが当たる場面では「痛い」「びっくり」、木から降りられなくなる場面では「怖い」「悲しい」が多く用いられた。

表2：感情語の内容（数値は使用した人数%）

	幼児	1年	2年	4年	6年	計
嫌だ	43	80	57	61	61	66
痛い	24	52	76	72	38	53
困った	14	28	76	72	61	48
怖い	21	33	50	66	52	44
悲しい	26	33	46	33	57	40
怒る	12	19	19	22	57	29
びっくり	4	14	23	27	4	14
心配	0	0	15	16	19	9
無理矢理	0	0	0	11	23	7
しつこい	0	4	7	11	4	4
後悔	0	0	0	5	19	3
不安	0	0	0	5	9	3
焦る	0	0	0	16	4	3
悔しい	0	4	0	0	4	1
かわいそう	12	28	15	0	0	12
嬉しい	56	76	69	33	52	66
良かった	24	57	76	66	52	53
ほっとした	0	4	7	22	19	8
いい気持ち	0	14	0	0	0	3
優しい	0	0	0	0	4	1

考察

以上、10の課題における感情語の使用を分析した。その結果、1つの課題において用いられる感情語は1からであり、6年生では他の年齢群の子どもよりも多い数の感情語が用いられること、特に理不尽にしかられるといった、典型的でない課題における反応が増すことが示された。また、ネガティブな場面では、より多様な語が用いられることが示唆された。

Shaver, Schwartz, Kirson & O'Connor (1987) は学生の作文に表れた感情語をクラスター分析し、プロトタイプを中心とするヒエラルキ構造として示している。基本レベルとされる感情概念は「愛」「喜び」「驚き」「怒り」「悲しみ」「恐れ」であり、ネガティブな概念の方がポジティブな概念よりも多い。また、下位の具体的な感情語も、ポジティブな単語は 49、ネガティブな単語は 83 で多かった。Shaver らは基本レベルの語彙は、語彙獲得にも反映されるとしているが、本研究の結果も、この考えを支持するものであった。

楽しい、嬉しいことであったときには、その感情が共有され、維持されればよいだろう。しかし、悲しい、つらい、苦しいことがあったときには、それを理解し、他者と共有し、受け入れ、再解釈を試みたり乗り越えたりすることが必要となるだろう。こういった作業がネガティブな語の使用の背景にあるのかもしれない。

Fivush, Hazzard, Sales Sarfati & Brown (2003) は暴力多発地域に住む 5-12 歳の子どもに、ポジティブな出来事、ネガティブな出来事について語ってもらうという調査を行っている。ポジティブな出来事は行楽や外出など比較的均一であったのに対し、ネガティブな出来事は家族の重い病気や死、怪我、苦痛を伴う検査、暴力、いじめ、薬物中毒の母親が逮捕されるなど、多様であった。これらの体験の語りを比較したところ、発話量には差はないが、ポジティブな出来事では「人物」「事物」が多く言及され、ネガティブな出来事では「内的状態」への言及が多かった。

本研究では、他者の感情に関する問いのみを検討したが、他者に対する自己の感情についても分析を進め、子どもの証言の査定や事情聴取の際の目安にも使える指針を提示したい。

引用文献

- Aldridge, M., & Wood, J. (1997). Talking about feelings: Young children's ability to express emotions. *Child & Neglect*, 21, 1221-1233.
- Bird, A., & Reese, E. (2006). Emotional Reminiscing and the Development of an Autobiographical Self. *Developmental Psychology*, 42, 613-626.
- Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of others' emotions. *Developmental Psychology*, 27, 448-455.
- Dunn, J., Bretherton, I., & Munn, P. (1987). Conversations about feeling states between mothers and their young children. *Developmental Psychology*, 23, 132-139.
- Fivush, R., Hazzard, A., Sales, J. M., Sarfati, D., & Brown, T. (2003). Creating coherence out of chaos? Children's narratives of emotionally positive and negative events. *Applied Cognitive Psychology*, 17, 1-19.

- Fivush, R., Berlin, L. J., Sales, J. M., Mennuti-Washburn, J., & Cassidy, J. (2003). Functions of parent-child reminiscing about emotionally negative events. *Memory*, 11(2), 179-192.
- Harter, S., & Whitesell, N. R. (1989). Developmental changes in children's understanding of single, multiple, and blended emotion concepts. In Saarni, Carolyn (Ed); Harris, Paul L. (Ed), *Children's understanding of emotion*. (pp. 81-116). New York, NY, US: Cambridge University Press.
- 岩渕悦太郎・村石昭三 (1976) 用例集-幼児の用語. 日本放送出版会.
- Shaver, P., Schwartz, J., Kirson, D., & O'Connor, C. (1987). Emotion knowledge: Further exploration of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1061-1086.
- Welch-Ross, M. K., Fasig, L. G., & Farrar, M. J. (1999). Predictors of preschoolers' self-knowledge: Reference to emotion and mental states in mother-child conversation about past events. *Cognitive Development*, 14, 401-422.